

フランス山からみた横浜の港と町並
『ル・モンド・イリュストレ』1864年4月16日号から

開港 の ひろば

NEWS YOKOHAMA ARCHIVES
OF HISTORY

編集・発行/横浜市総務局横浜開港資料館
横浜市中央区日本大通3番地 〒231 電話(045)201-2100
発行日/昭和63年8月3日
印刷/南三信印刷所
横浜市広報印刷物登録第620167号 類別・分類B-BE160

企画展示の紹介

フランス人の描いた 幕末・明治の日本

— 絵入り新聞から —

横浜開港資料館では、内外の文書・記録類とともに新聞資料の収集にも力を入れています。特に、一九世紀に発行された欧字新聞については、近年海外での調査もおこなうようになり、充実さを増しています。

一九四〇年発行分のうち、数号が欠。

● 絵入り新聞の隆盛

絵入り新聞は、『イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』の成功がきっかけとなって一九世紀半ばに各国で創刊が相つぎます。印刷・木版技術の発達とその大きな要因となりました。特に木版技術の発達は、絵入り新聞の命といえる美しいさし絵の多用を可能にしました。さし絵は、フランスから遠く離れた国々の情勢や、そこに住む人々の風俗を伝えるのには最適の手段となり、鎖国から開国へ、そして近代化へと歩んでいく日本のさまざまな姿も描き出されていきます。さし絵は、また、いく人かのフランス人の手を経て制作されるものであることを考えると、たんにあるがままの日本を描き出しただけでなく、フランス人がとらえた日本像を、あるいは日本に対する関心のありかをものたつているものだともいえるでしょう。

● ささまざまな特派員

さし絵のもととなるスケッチ(あるいは写真)の送り手は、イギリスの『イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』が早いころに画家ワーグマンを日本に送ってきて、かれ一人が絵を送り続けたのとは違い、フランスの二紙はその時々でいろいろな人がその任にあたりました。初期は、フランス艦隊司令長官付書記官のルサンをはじめとするフランス艦隊の海軍士官からのものがほとんどです。かれらは、士官学校で授業の一環として絵を学んだことのある人々です。幕府軍側について箱館戦争をたかかうフランスの陸軍士官、ブリュネも画き送っています。また、日仏間の定期航路を開いたフランス郵船の船長も英・仏横浜居留地駐屯軍撤退(一八七五年)をはじめとする重要な歴史事実を画きとめています。一八七六年にギメとともに来日するレガメの絵もみえます。明治中期になると、諷刺雑誌「トバエ」の刊行で知られるヒゴーもさし絵画家として登場してきます。

当資料館では、これらフランスの絵入り新聞の目録として『イラストレイション』日本関係記事集(全三巻)の刊行を開始しており、第一、二巻が刊行済みです。また、今回の展示にあわせて『ル・モンド・イリュストレ』日本関係さし絵集も刊行いたします。ご利用ください。(中武)

馬淵明子氏に聞く

『フランス人の描いた幕末・明治の日本』展に寄せて

幕末・明治の日本

横浜開港資料館では八月三日から『フランス人の描いた幕末・明治の日本―絵入り新聞から―』という展示を開催いたします。そこで本日は西洋美術史に造詣のふかい馬淵明子さんをお迎えし、展示の一面を占める「ジャポニスム」についてお話を伺うことにしました。馬淵さんは、最近まで国立西洋美術館の学芸員をつとめられ現在は青山学院女子短期大学助教でいらつしやいます。

斎藤 まず、展示を担当した中武さんから展示の内容について聞かせてください。

中武 開港資料館の収集資料には古文書・記録類のほかに、新聞などもありますが、中でも絵入り新聞はかなり揃っています。目録として『イリュストラシオン』日本関係記事集』を刊行するまでになりました。記事集編集作業の過程で、これを展示で、ぜひ紹介できないだろうかという意見があり、同じフランスの絵入り新聞『ル・モンド・イリュストレ』も使って、幕末から明治中期までの日本がどのようにフランスに紹介されていたか、またフランス人はどのように日本をとらえていたかを紹介することにしました。その中で、明治中期のフランスの日本に対する関心を語る際におとすことのできない動きが「ジャポニスム」と呼ばれているものなのです。

斎藤 現在、パリではちょうど「ジャポニスム」展が開かれています。展示を担当されたオルセー美術館の主任学芸員のラカンブルさんも何度も当館に調査に来られていたようですが、馬淵さんも国立西洋美術館の非常勤研究員として展示の企画に参与されていますので、まず、「ジャポニスム」とはどういうものかということからお話し願えますか。

馬淵 「ジャポニスム」というのは面白い言葉でして、普通、フランス語の○○イスムという言葉には英語にも対応する語があるので、ジャポニスムはフランス語だけで、英語の場合も、「Japonisme」と書くのです。それだけフランス中心に考えられていた運動だと言えます。もう一つ「ジャポネズリー」という語があります。これは十七世紀から十八世紀にかけてフランスに中国趣味が行

きたった時に使われたシノワズリーに対する言葉でして、日本の美術が開国とほとんど同時にかなりの量がヨーロッパに渡った時に、まず「ジャポネズリー」として捉えられたのです。つまり、それまであった中国趣味と同様のレベルのものとして、日本の美術・文化が入っていったのです。それが次第にフランスを中心にして美術運動として深まっていくに従って「ジャポニスム」と呼ぶことが定着したのです。大体一八七〇年代始め頃です。



馬淵明子氏

日本語にはうまく訳せないですがあえて言うなら「日本主義」でしょうか。私どもは、「日本美術のヨーロッパ芸術に対する影響」というふうに捉えています。ジャポネズリーという現象も含めて非常に広い意味で日本の芸術のもっている様々な側面がヨーロッパに受け入れられていった現象を「ジャポニスム」と呼んでいます。

中武 日本主義ですか。
馬淵 日本主義というとなんとなく国粹主義という感じに捉えられますので、やはりカタカナで「ジャポニスム」と呼ぶのが誤解がなく

いいと思います。

斎藤 当館収集の絵入り新聞には『イリュストラシオン』、『ル・モンド・イリュストレ』のほかにイギリスの『イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』がありまして、これにも日本を紹介する絵がたくさんあります。幕末期だと英仏共通した記事、たとえば薩英戦争や生麦事件が載っていますが、明治に入ってから英仏で少し違うような気がしますが、どうですか。

中武 フランスの新聞の方は、一八七〇〜八〇年にかけて日本の美術・文化への傾倒が目につきます。その時期の日本の時事問題には関心がないかのように、文化に関する記事・さし絵が圧倒的に多いですね。明治十年代に入ると日本国内も落ち着いてきて絵になる事件が少なくなるというのも事実ですが、それでもロンドンニュースに比べて事件報道は少ないような気がします。

馬淵 明治になってフランスの政治的役割が落ちてきたということでしょうか。それとも特派員や読者の関心が文化的な方に寄っていったということですか。

中武 幕末のロッシュの時代程ではないにしても、フランスは明治になってからも軍事顧問団を派遣したりしてきていますから、その役割は小さくはないと思います。時事記事は送る必要が無かつ

たというか、フランス国内では浮世絵などだけで、自分たちの日本像を構築するのに十分だったからなのではという気がします。

馬淵 そうかもしれませんね。
中武 他の欧米諸国にも同じように日本の美術品が入っていったのに、フランスだけが、あのような受け入れ方をしたのはどこに違いがあるのでしょうか。

馬淵 実際に品物・美術品の入り方はイギリスも決して遅れていません。一八六二年のロンドン万国博覧会には、駐日公使のオールコックが自分のコレクションを送っていて、その影響が美学的にかなりあつてホイットスターとかロセッティ兄弟などジャポニザンと言われる人たちが、ロンドン万博を見てかなり早い時期に日本に目を開かれた人たちは、意識的に日本文化を早く吸収したということがあります。ですから情報の受け入れでイギリスが大きく遅れていたということはないし、ホイットスターなどはフランスにきて、フランス人の仲間たちと日本主義を研鑽し合っています。つまりロンドンには、芸術的に遅れていたのが六二年の万博もジャポニスムの中心地になり得なかつたのです。アメリカも決して情報の量からすれば遅れてないし、オランダにいたつては圧倒的に日本美術品を持っていたわけですね。シボルト・コレクションに見られるように。開国以後日本に

関する情報は、絵入り新聞とか本のさし絵などいろいろな形でたくさん入っていたが、それを美術に利用するかどうかというのはまた別のレベルの問題だと思えます。つまり、たくさん見たから影響を受けるということではないのです。ジャポニスムというのは外からの影響というよりもむしろヨーロッパ、特にフランスが非常に危機感を持って感じていた美術運動の、危機を解消する一つの手段として捉えられた。中の人間が必要としていたものが、そこに来たという成り行きだと思います。危機感の熟していなかった土地では、単なる自分たちと違う異国のきれいな物、面白い物ということで止まっているわけで、実は自分たちの求める物がそこに表現されているというところを感じるだけの芸術的深まりがある場所とない場所と違ったのだと思います。

フランスにおける芸術の危機意識というのはいろいろな形ではつきりしています。特に一八六三年のアカデミズムが崩壊した年と、印象派展がはじまる七四年という幾つかのステップがあつて、その時期に日本の物がどつと入つていったのです。そして日本趣味の段階から非常に早く次の段階に移つていったのがフランスということですね。つまり、色彩とか構図の問題、空間表現であるとか、そういうレベルの問題として捉えたというところとです。その様なフランス人にとつては、原物に対する興味は非常に強く、本物の浮世絵、工芸品をたくさん見て日本美術のエッセンスを吸収していくわけで、実際の日本のことをどう知らなつてもよかつたのだらうという気がします。逆に言えば自分たちでイメージを捏造したわけで、ゴッホなどは、自分勝手に日本のイメージを作つて日本とはこういう国だと弟に手紙を書き送つています。

齋藤 新聞のさし絵とは別に直接に日本の美術・工芸品が海外に出ていくという流れがありますが、その先は必ずしもフランスだけでなく、イギリス、少し遅れてアメリカにも出ていっています。しかし、受け取られかたにはかなり違いがある感じがします。

英米の場合は博物学的、民族的に捉えているようで、民具まで集めてしまうという感じです。日本通として知られるイギリスのチェンバレンにしても、価値観から言えばあくまでもイギリスが上であつて、日本を研究しても日本から影響を受けるということがない。それに比べフランスは、どんどん学びとつていくと言えるのではないのでしょうか。

馬淵 本当に日本にきて、日本の文化をきちんと紹介した人には、例えば仏教美術に興味を持ったギメがいますが滞在期間は短いですし、日本に関して本を書いたゴン

ス、デュレなどもやはり滞在期間は短いです。自己の優位性を崩さないことではイギリス人に劣らないですよ。フランス人の場合はある種の先入観を持つてやつて来て、日本からは都合の良いところ、自分の欲しいものしか学ばないというところがあります。それは自分たちの文化にしっかりとした構造を信じているからでしょう。

齋藤 『ジャポニスム』展で何か面白い発見がありましたか。

馬淵 ラカンブルさんが日本の情報がないように入っていたかということをお細かく調べていて、開国以前に出た本の中に視覚的紹介が意外にあつたということがあります。パリイという彫刻家の作品に亀の上に鶴が乗っている作品がありまして、シーボルトの『日本』にさし絵として使われている鶴亀の図柄から影響を受けたのではと、フカンブルさんは言っています。

齋藤 鶴亀ですか。

馬淵 これまでコウノトリだと言われてきたのですが、いずれにしてもヨーロッパにとっては意味のないとりあわせですから、日本で長寿の意味あいを持つ組み合わせだということを知つて使つたのでしょうか。これは、一八五〇年頃の作品ですし、探せば開国以前のものも、もう少し出てくると思いますよ。

齋藤 彫刻の話が出ましたが、工芸品におけるジャポニスムという

のは、どうなのでしょう。

馬淵 工芸運動におけるジャポニスムは絵画とは多少事情が違い、ナンシー、グラスゴー、ハンブルク、ウィーンなどで盛んになりました。

中武 時期はいつ頃ですか。

馬淵 絵画よりは多少遅れますが一九世紀末の各都市で同時発生的に花開くといった感じです。工芸品の流入路は、一八七三年のウィーン万博の出陳品とか、ハプスブルク家の皇太子フランツ・フェルディナントが来日し、コレクションとして持ち帰っています。

とここで、横浜の輸出商がどんな物を輸出していたか史料はあるのですか。

齋藤 輸出商には、クーン・コムル商会とか、アーレンス商会などがあり、クーン・コムル商会については店の内部の写真があります。史料はあまりありません。

馬淵 写真には、実際にどの様なものが見えますか。

齋藤 あらゆるものが、ところ狭しと並んでいて、仏像など古美術品もあるし、陶器・漆器・金属・銅器も多いです。

馬淵 帳簿などの史料が見つかるというですね。フランス側でも林忠正の店、ビングの店の活動については詳しい研究がありますが、それ以外の輸出商についてははっきりわかっていません。

齋藤 日本の美術といつても一様でないですからね。

馬淵 非常に多様ですね。刀のつばとか、根付けなども結構デザインに影響をあたえているし。

齋藤 都合のいいところだけを探るなら、何でもいいことになりませぬ。

馬淵 でも、芸術家の方とすれば、自分の作つているものに近いもの、画家なら浮世絵・屏風・絵本冊子の部類、工芸家なら刀のつば・焼き物に関心がいつていますし、全然違う分野に影響を与えるということも少ないです。染色の型紙が黒と白の対比として捉えられ、版画に影響を与えたということがありますね。これまでの研究は絵画中心でしたから、工芸品の研究が進めば、いろいろな面白い例が出てくるかもしれません。

中武 フランス人の間での『ジャポニスム』展の評判はいかがでしょう。

馬淵 専門家たちは非常に面白がつ



クーン・コムル商会の店内

てほめてくれました。一般の人たちの意見が出る前に帰国したので、**「ル・モンド」「フィガロ」「コティディアン」**等の新聞に批評が出ていました。フランス人の意見を代表しているのかも知れませんが**「ル・モンド」**は皮肉に書いていました。工芸品が影響を与えていたのは展示を見てわかるが、絵画、特に印象派の大家やもう少し後の画家の作品がはたして日本の影響がなければできなかったのか」と書かれています。フランスを中心にものごとを考える人たちはとしては当然の意見だと思いましたが。それを説得するためにたくさんの例を示したのですがね。



パリの『ジャポニスム』展会場

まで日本が影響を与えたかどうかというのは、いまだに疑問があるようです。
斎藤 影響があったというのと、影響がなければ作品が生まれなかつ

たというのは、ずいぶん距離がありますからね。

馬淵 そうです。非常に優れた作家の場合は影響が消化されていても、しかも日本だけの影響とは必ずしも言えない面があります。マネなどは、スペインの影響も同時に入っていますし、マネの中で日本のなものとスペインのなものが化学反応を起こして別の美術が生まれたというか、うまくミックスされて出て来ているわけです。日本だけだと言っているのではなく、日本のなものが貢献していると言いたいのですが、見事に消化した例というのはかえってわかりにくいものです。

『ジャポニスム』展はこの秋に日本に来ますが、展覧会を見た日本の方が「何だフランスなんてたいたことないじゃないか、こんなに色々なものを日本から借りているじゃないか」と思われることを私は心配しているのですが。彼等は真似したのではなく、吸収する材料として消化したわけで、そのエネルギーを見て欲しいと思います。

斎藤 『ジャポニスム』展は国立西洋美術館でほぼ同じ内容で開催されるのですね。

馬淵 九月二三日から二月一日まで開かれます。基本的に同じ構成で展示します。

斎藤 当館からもビゴールの作品を出陳することになっていますが。

馬淵 ええ、作品をお借りするだけでなく、外国人が書いた日本論ということでも特にブルーム・コレクシオンはたくさん利用させてもらいました。また、さし絵本とか雑誌、『イリュストラシオン』などもです。

中武 絵入り新聞や本のさし絵を随分資料として使っていますね。
馬淵 ヨーロッパ人にとって文章を裏付けるものとして、さし絵で日本をイメージすることがあったと思います。面白いなと思い、今回とりあげたものにゴッホとロチの『お菊さん』の関係があります。先ほど話が出ましたがゴッホは『お菊さん』を読み感銘を受け、弟に手紙を出すたびに『お菊さん』によれば日本はこういうところだそうだと書いているのです。そこで『お菊さん』を見てみると「せみ」の絵が多く、ゴッホ自身もせみのデッサンを残しているのです。ロチが長崎に来た時は夏ですから、せみが鳴いていて、それをさし絵作家として印象的に使ったのでしょ



ロチ『お菊さん』から

う。ゴッホが日本を思う時非常に暑い国、南国というイメージを強く持った、つまりせみの絵がイメージの伝達の媒介としてゴッホの中に定着していったのではないかと思えます。せみはゴッホが生まれたオランダとかパリにはいないので、フランス人にとって地中海、南方のイメージにつながるのです。日本というのは、太陽がさんさんと照つていて、空気が澄んでいて、コントラストが強い国というイメージに捉えられたのですね。

中武 絵入り新聞のさし絵をみると版画に起こす時にもとの写真やスケッチとかなり変わっているのに気がつきます。F・ペアトの写真をもとにした鎌倉の大仏の絵なども、もとの写真と比べると大仏の顔はちゃんと描かれているのに、背景の松林が南洋的な繁みになってしまっています。

馬淵 ヨーロッパ人にとって大事なものは人体表現であつて、それ以外の部分は自分の知っているイメージにしてしまうのでしょう。

斎藤 日本に来る人は中近東、東南アジア、中国を経由して来るのですが、その中で日本が目ざされたというのはいは。

馬淵 なぜ日本がヨーロッパにちやほやされたかというのと、中国はアヘン戦争があつたりして国の力が弱つていたり、風俗が乱れていたり、香港・上海を経由してくる人にとって印象がよくない。それ

が日本にくると、清潔・勤勉であるという風に見えるし、政治的にも盛り上がりのある時期ですから、アジア諸国に比して高く評価されたということもあります。美術の上で中国にもいいものがたくさんあつても、イメージがよくないことが、日本のものが入つていった一つの理由になるのではないでしょう。

斎藤 『ジャポニスム』展が日本で開かれると日本とフランスの関係だけでなく、幕末・明治にヨーロッパに渡つた美術品を見られるわけで、日本にとって過去と現在の対比という二つの見方ができそうですね。

馬淵 ただ残念ながら、今回の展覧会は基本的にはヨーロッパの芸術をお見せするので、それに貢献した日本の美術は多くありません。それは、実際にヨーロッパに渡つたもので由来のはつきりしたものに限つたからです。

今後、江戸美術の斬新さ、ヨーロッパとの交流などの展示をできればおもしろいですね。開港資料館でもできると思います。
斎藤 今日は長時間ありがとうございました。

(六月二七日の座談です。聞き手は館員の**中武香奈美・斎藤多喜夫**があたりました。)

「サムライ太平洋を渡る」展余話 地方名主の世界一周

一、使節と従者

幕府は万延元年(一八六〇)、日米修好通商条約の批准書交換の目的のため、使節団七十七名をワシントンへ派遣した。同時に軍艦咸臨丸が使節団の護衛と遠洋航海訓練を兼ねて派遣された。この艦には九十六名が乗り組んだ。したがって両方の派遣人員は百七十三名にものぼった。

ところで、咸臨丸はサンフランシスコに到着後五十余日滞在し、帰国したが、使節団は咸臨丸一行と別れ、パナマを経由し目的地へと向かった。帰国にあたっては、ケープタウンを回航し、ジャワ・香港を経て帰国。旅程は約九ヶ月に及び、公的には日本人として初めての世界一周となった。

使節団一行は新見豊前守を正使とする幕田等と従者等で構成された。その数は幕田二十名、従者五十一名、その他六名の割合であった。この構成から従者の多さがとくに目立っている。

そこで、従者たちといっても様々で、まず幕田の家僕が数名随行している。これは当然随行してあたりまえである。問題は幕田以外の人々が従者となっている点である。

二、地方名主三浦東造

これには、諸藩士が十四名参加している、十一藩に及んだ。そして残る数十名の従者は地方出身の一般人であったのである。意外な感じが覚えよう。家僕と藩士はおそらく命令がくだって随行したと推定されるから費用は自弁ではなかつたろう。問題は一般人で、経費はもちろん自己負担であったろう。この点から地方の資産家の出身ということになる。おそらく名主層等だつたらう。

しかし、資産家であるから行けたという理解だけでは不十分で、死を賭けた渡航の強い意志の存在をそこに認めなければならぬ。さらには彼らが一人二人という随行数ではなかつたことから地方名主層・知識人たちの世界に横たわる時代の先取性に注目しなければならぬ。

二、地方名主三浦東造

従者の一人に出羽国由利郡矢島出身の三浦東造がいた。勅定組頭森田岡太郎の従者であった。

そこで、現在の秋田県由利郡矢島町に、生家三浦俊男さん宅を訪れ、調査させてもらった。当時東造は二十四歳の壮年であつ

たが、渡航に至るまでの経歴は名主をしたというだけで、それ以外のことははつきりしない。一説には三度ほど江戸に行ったということ、渡航にあたっては藩主生駒氏の仲介があつたということが伝わっている。この断片的な話を裏付ける史料はいまのところない。いつてまた否定しようもないことであり、むしろ有力な手がかりのひとつとして尊重したい。

ところで、地方名主の江戸遊学はかなり広くみられた現象であり、三浦の江戸行きの話もあながち否定できないことだ。その上、三浦と同藩所属の名主のなかには京都・大坂に遊学し交流をもつ者さえみられた例からいって、三浦の江戸行きは不思議ではない。もうひとつ、藩主の推薦の件だが、家老佐藤家と三浦との密接な縁族関係を確認できたことから、藩主の幕府に対する紹介はかなり現実味を帯びた話である。

先に名主の「渡航の意志」に注目すべきだといつた。三浦家には、あとも紹介するが、東造のメモ類を基礎に清書された日記一部が所蔵されているのみである。この日記の随所に当時の教養ある者がよくした漢詩が織り込まれている。この一点を指摘するだけで東造という人物の一端が理解できる。地方名主として血筋の良い教養ある人物像が想像できる。その教養であるが、矢島町郷土資料館には東

造と近しかった家老佐藤家の蔵書が展示されていて、そのなかに、著作省吾著「坤輿図説」、「海国兵談」、「史記評林」などを始めとする貴重な、多くの書籍がみられた。

東造家にもおそらくこれに類した資料はあつたはずであるが、残念ながら大水害にあつたというから散佚したのであろう。東造は渡航前に、先の一部資料を通じておそらく日本の開国・開港に対し彼なりの見識をもつことができ、江戸遊学の機会にはなお一層、国際関係に興味を持つことができたと思われる。

三、東造の「航海日記」

かつて東造の日記は五冊あつた。しかし現在は第三冊目と第五冊目の二冊しかない。

本史料は、慶応四年に、東造が渡航中メモしてきた書類から清書されたもので、筆者は東造の生家に近い川原地域の寺子屋の先生与茂吉であつた。この時、すでに第一、二、四冊分に該当する部分が失っていた可能性もある。いずれにしてもメモといっても、日記の内容から推定すると、日記体の詳細な備忘録であつたと思う。

さて日記の内容であるが、まず第三冊目は使節一行がワシントンを目指し、パナマからカリブ海を経て大統領に謁見し、東造ら従者が連れ立って市街を見学し始めたところまで終わっている。

東造はワシントンの街では新聞が発行され各家に配達されていることに驚くとともに、婦女子が喜んで読んでいる場面に接し、彼のの違いにあらためて驚いている。見るもの聞くものすべてが彼にとつては驚きで、ついに彼は「中々拙筆二記スル能わず」と告白している。

第五冊目は、アフリカ海岸を経由したところから書かれていて、ケープタウンを回航し、パタゴニア・ジャワ、香港に寄港し、九月二十九日、築地の軍艦操練所へ到着したところで終わっている。

東造はアフリカのルアンダ(アングラ国)に寄港した際、「土人ノ足ニハ鉄鎖ヲ繋ギ、前奴ト後奴ト相接連シ、其遁逃ヲ防ギ、一人ノ白皙人、之ヲ護送ス」という状況を見て強い衝撃を受けている。またパタゴニアは日本とは特になじみ深かつた所だつたせいも、特に詳記されている。

それにしても東造自身の備忘録を失つたのはいかにも残念である。地方の名主がどういう経緯で渡航することになったのか、そのことが地方の村、もしくは名主との関係を解く重要なヒントを得ることになつたかもしれないのである。

(阿部征寛)

資料よもやまばなし

『ジャパン・ヘラルド』・『ジャパン・エクスプレス』両紙の生麦事件報道について

はじめに

一八六二年九月一四日(文久二年八月二十一日)午後三時頃、その後の幕末政局の進展をはやめることとなる生麦事件が勃発した。事件そのものについては、既に多数の書物が刊行されていて、いままさら歴史事実をくつがえすような新資料が発見されるとも思えないのだが、それでもなお、歴史事実を補足するに足ると思われる新しい資料を見い出すと心がおどる。また、歴史資料の残存がいかにも困難なことであり、また偶然性の強いものであるかということも、常々思い知らされることである。しかしそれゆえにこそ、画期的な資料ではないにしても、埋もれていた資料を紹介したくなるのである。ここでは以上のような視点から、アメリカ国務省文書とフランス外務省文書の中に残されている生麦事件報道を取り上げて紹介する。

○ブラックの『ヤング・ジャパン』と『ジャパン・ヘラルド』紙

生麦事件の報道に関する資料としては、一八八〇年に出版された

J・R・ブラックの『ヤング・ジャパン』がまず思い浮かぶ。ブラックは一八六五年に、六一年十一月から横浜で発行されていた週刊の英字新聞『ジャパン・ヘラルド』(The Japan Herald)の編集者となり、その後一八六七年に『ジャパン・ガゼット』、一八七〇年に『フアースト』、一八七二年に『日新真事誌』を発行した卓越したジャーナリストである。



J. R. ブラック (『ジャパン・パンチ』より)

右の本の中でブラックは、『ジャパン・ヘラルド』の記事を引用して、生麦事件と事件勃発後の横浜居留地の様子を描写している。しかし、『一八六二年九月十五日横浜発』で始まるこの記述からは、『ヘラルド』紙の何日号の記事が引用されたのか皆目わからなかった。ハンサードにより創刊された『ヘラルド』紙は、毎土曜夕方定期的に発

行されている。報道における同時性・迅速性の意味を考える場合、発行された時日の確認は必須のものである。現在まで、さまざまの著作がこの記事を参考にしているが、これらにもかわらぬ、ヘラルド報道の時日のことは意外に考慮されてこなかった。そこで、原紙を確認することにした。

ところが、灯台下暗しで、当資料館のドン・ブラウン文庫の中に、ブラックが引用した号が収蔵されていたのである(この新聞は、『日本初期新聞全集』2に収録されている)。それが、『ジャパン・ヘラルド』一八六二年九月二十日号、土曜日、Vol.1 No.44である。さて、ここまではよかつたのだが、いざこの英字新聞を読んでも、その記事の冒頭の部分に、

From our Extra of 10th Sept. Yokohama, 15th September, 1862. という記述があるのにあつた。つまり、二十日号の記事は、

十六日に出た号外を転載したものであつたのである。ブラックは、どちらを引用したのであろうか。彼は、一八六三年頃に来日して、それ以前の記述は『ジャパン・ヘラルド』の綴じ込みなどを参考に叙述したことが『ヤング・ジャパン』の「まえがき」にうたわれている。このような事情を考慮すると、前述の生麦報道に関しては、彼のコメントがない以上、右記どの号を引用したものなのか確認



のしようがない。しかし文面からすると、どうも二十日号のようである。いずれにしても次に、号外を捜す必要が生じてきた。

○『ジャパン・ヘラルド』紙の号外発見

残念なことに、国内ではこの号外そのものを見つけることはできなかった。そこで、英、米、仏国の外務省資料などをあたってみることにした。

そして、この号外を、アメリカ国務省文書の九月十八日付神奈川領事報告の中に見つけることができたのである。(RG59/135 RI 2014の附属文書No.7)左がその写真である。

では、この号外記事を紹介するまえに、事件が勃発してからの横浜居留地の様子を簡単に述べておこう。事件当日の夕方から翌十五

日にかけて、居留地は興奮状態に包まれ、数次にわたって居留民会が開かれた。英国の横浜領事ヴァイス議長のもとに、報復などについての討議がなされたが、英国代理公使ニールは居留民の報復提案を拒否した。ヴァイスの越権行為とニールの冷静な行動との確執が絡まったこともあつて、居留民会は殺

気だった雰囲気にあつたらしい。前述の十五日横浜発の記事は、この十五日の居留民会を取材した記者(ハンサード自身の可能性が強い)が、書いたものと思われる。最も残酷な殺人事件についての居留民会からの報告を許可をえて号外として発行する、という冒頭の見出しは、居留地の慌ただしさと怒りをよくあらわしている(なおこの報告は英国外務省文書にも添付されている)。二十日発行予定の通常号を待ちきれず、十六日号外として発行したよう、居留民の

ニール批判が濃厚にみうけられる。それはさておき、実に素早い報道がなされたといえるのではないだろうか。やはり、記事を原紙で確認することには意味がありそうである。

この号外では、事件の概要と居留民会を中心とするその後の居留地の動きが、詳細に述べられている。リチャードソンの死体を発見する箇所では、「このあたり(神奈川県と川崎の中間)で彼らは探索を行ったが、なにも情報を得られなかった。住民は、事件については全く知らないふりをしていった。しかし、一人の少年が前に進みでて、死体のあり場所を教えてくれた。少年の案内で半マイルほど戻ると、道から十ヤードばかり離れた小屋のそばに死体が横たわっているのを発見した。二枚の古むしろでおおわれていた。…」と、口を閉ざす生麦村住民の非協力ぶりや、一少年の案内で死体を発見したことなどを、伝えている。

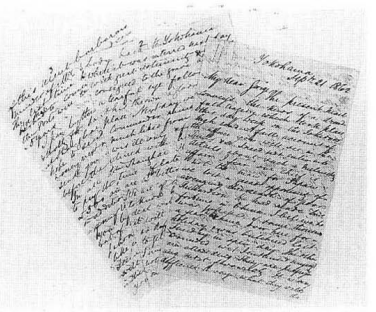
さて、前述した二十日の第四十四号通常号は、当然のことながら、広告などの第一面を除く全紙面が生麦事件の報道でうずめつくされた。島津久光一行の動向を含めた事件の経過や、死体発見者エリス・エリアス、検死を行った英国公使館付医官ウイリアム・ウイリスの供述、被疑者であるクラークとマーシャル本人の証言などが載せられている。また、すでに死後硬直が

始まっていたリチャードソンの検死報告(検死は十四日の午後十一時に行われた)が、十項目にわたって詳しく掲載された。このような生々しい記事を読んだ居留民が、怒りを新たにしたことは想像に難くない。通常は四ページ仕立てであるが、この号のみは特別に一ページ追加して五ページになった。総じて、取材の成果をふまえた正確な記事といえよう。

...the Japanese Interpreter belonging to the Custom House at Yokohama, and who was personally known by Mr. Marshall and spoken to by him. I think I could recognise one of those Interpreters on seeing him again. I can only recognise the uniform and crest of the advanced guard. They were dressed in dark blue and I saw on the sleeves of nearly the whole of the advanced guard, a crest, similar to the slash which I now give you, consisting of two broad white lines placed parallel.

WILLIAM MARSHALL deposed as follows.—On the afternoon of Sunday, the 14th instant, Mrs. Borredale, Mr. Richardson, Mr. Woodthrope Clarke and I, rode from Kanagawa along the Tokaido on high road in the direction of Kawasaki. When we got to that part of the road which is called by foreigners here "The Avenue," I saw a Japanese Interpreter whom I know and two other Japanese, that Interpreter I know as one of those belonging to the Custom House...

参考のために、現場に急行した医官ウイリスが長兄へあてた九月二十一日付の書簡を下に掲げておく。住民らに妨害されながら、道端のむしろでかこった小屋のようなどころにリチャードソンの死体を発見したこと、ニールが「臆病者」として軽蔑の対象になっていることなどが記されている。ヘラルド紙の供述と比較すると面白い。なお、仏国外務省文書中に収録されている二十日号の記事の続き



2. The Japan Herald Correspondence (一ページにわたる投書欄) というものがある。これは、当資料館所蔵の二十日号には含まれていないのだが、十六日号外記事の訂正を編集長に要求する居留民やその他の証言者の投書、アプリン中尉に対するニール代理公使の公開質問状とその回答などを読むと、二十日号の付録と考えるとよさそうである。『ジャパン・ヘラルド』投書欄が別刷であった可能性もあるが、現在のところ不明としかいえない。いずれにしても、居留民とニールは、ヘラルド紙上で意見を相互にたたかわせたと考えて間違いない。

○『ジャパン・エクスプレス』紙の報道
さて、ヘラルド紙とは別に、まぼろしの新聞といわれていたジョイヤーの『ジャパン・エクスプレス』(The Japan Express)も、九月二十日号(Vol.1 No.18)において「The Late Murder」の見出しで事件を報道した。この号は、現在のところ仏国外務省文書中にしか見当たらない新資料である(Correspondance Politique Japon, 1862, Direction politique No.193の附属文書)。しかし、いかなせん木版刷(手書き、表裏二ページ)の新聞で、ヘラルド紙の本格的な報道とは比べものにならない。商況を主体に政治事件などのニュースを添えたサーキュラー(商館通信)と、本格的な新聞の中間的なものであったことを物語っている(エクスプレス紙については、当館より近刊の予定である「横浜もののはじめ考」を参照されたい)。

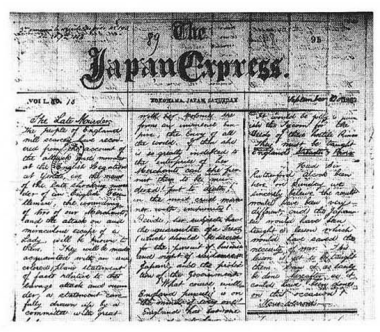
二十日号(Vol.1 No.18)において「The Late Murder」の見出しで事件を報道した。この号は、現在のところ仏国外務省文書中にしか見当たらない新資料である(Correspondance Politique Japon, 1862, Direction politique No.193の附属文書)。しかし、いかなせん木版刷(手書き、表裏二ページ)の新聞で、ヘラルド紙の本格的な報道とは比べものにならない。商況を主体に政治事件などのニュースを添えたサーキュラー(商館通信)と、本格的な新聞の中間的なものであったことを物語っている(エクスプレス紙については、当館より近刊の予定である「横浜もののはじめ考」を参照されたい)。

いるのだが、肝心な事件の詳細は一向に叙述されていないのである。以上、生麦事件を報道した二紙の記事を紹介した。

○翻訳筆写新聞の存在
さて、ここで原資料から少し離れて、この生麦事件を報道した欧字新聞の翻訳について考えておきたい。幕末期、蕃書調所(文久二年五月には洋書調所と改称)が、主に海外情報を中心に欧字新聞を翻訳し幕政の参考のために幕閣へ提出し続けていた。また、諸大名へもその控本の転写が許可されていたようである。前記の二紙も翻訳された可能性がある。しかし、翻訳筆写新聞がまだ確認されていない以上、どのような訳であったのか、またどのような訳でどの藩に伝わっていたのか、知るよすがもない。いずれにしても、生麦事件の帰結である一八六三年の薩英戦争を報道した欧字新聞が、翻訳され数多く筆写・伝播されていたのには比べると、生麦事件については、諸藩が欧字新聞から情報を得ることはまだ難しい状況にあったといえるのではないだろうか。

(吉良芳恵)

記事内容も、事件を簡単に伝えるだけのもので、報道につきものの取材をした形跡はない。オールコックが在日中であつたら、交渉結果は違ったものになつたであろうなどと、感想めいたことを述べて



横浜新風土記稿

④

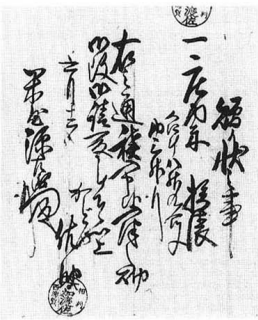
市域の米穀市場と米の消費

1 はじめに

本稿は、近世後期の米の流通について考察するものである。特に、市域への米の移入と町場での米の消費を取り上げ、市域の町場が米の消費地としてどのような位置を占めていたのかを考えてみたい。従来、こうした研究はほとんどなされたことがなかった。なぜなら、市域は米の生産地としてのイメージが強く、米の流通についての研究も年貢米や商人米の移出についてのものが大部分であったからである。勿論、こうした研究には教えられることも多く、農村・湊・江戸との関係が具体的に明らかにされつつあるといえる。

しかし、これに反して、市域の町場での米の消費については不明な点が極めて多い。市域には当時の一級国道である東海道が貫通し、金沢八景などの観光地、神奈川湊を始めとする海沿いの村々など、多くの町場が存在した。これらの町場では、かなりの量の米が消費され、地域の米穀市場が形成されていたものと思われる。今ここで、これらの米穀市場の実態を完全に明らかにすることは

できないが、いくつかの事例が残されている。たとえば、金沢八景近隣の町屋村(金沢区)では商人が、江戸から全国各地の米を集荷していた(拙稿「横浜新風土記稿」一町屋村)『たまくす』第五号)。また、森公田村(磯子区)の商人の家にも、江戸商人から各地の米を集荷していたことを記した文書が多数残されている(磯子区・斎藤清四郎家文書。さらに、明治十三浦賀の商人が庄内米を金沢八景周辺の商人に売ったことを記した文書。



年(一八八〇)の『神奈川県統計書』は、神奈川湊に年間六万五千石以上の米が移入されたことを伝えている。

第1表は、これらの残された文書から作成したもので、市域の町場で消費された米の種類を示すも

(第1表) 町場で消費された米の種類

Table with 4 columns: 地域 (Region), 種類 (Type), 地域 (Region), 種類 (Type). It lists various rice types like '総年貢米', '新山新米', '神山新米' and their consumption locations like '東海地方', '北陸地方', '中国地方'.

のである。この表から全国各地の米が市域に集まり、米の最終消費地になっていくことが伺える。

また、第2表は、東海道筋に居住した穀物商の一覧であるが、その総人数は一一四人に達し、東海道沿いでは、ほぼ数百メートルに一軒の割合で穀物商がいたことが判明する。勿論、これらの穀物商は、本稿が対象とする移入米だけを扱ったわけではないが、穀物取引の隆盛を伺うことができる。

では、これらの穀物商が購入した米は、市域の町場でどのように消費されたのであろうか。まず、第一に考えられるのは、町場の住民の食料である。近世後期の宿場や湊には、農業生産から遊離した人々が多数住んでおり、これらの人々は日々米を購入していた。たとえば、明治初年の保土ヶ谷宿

戸町(保土ヶ谷区)の場合には、全戸数一二二戸(六三八人)の内、

六九戸(三三七人)が耕地を所有しておらず、これらの人々を米の購買層とみることが出来る。彼らが消費する米は少なく見積っても年間数百石になったと考えられ、すべての町場を合計すれば米の消費量はかなりの額になったと思われる。

しかし、住民が消費する米の量は、全体から見れば、それほど多いものではなかった。むしろ、旅人や荷物運搬のために立ち寄る人々が消費する米の方が、はるかに多かった。その実態を具体的に数字で示すことはできないが、この地域に年間数万石の米が移入された

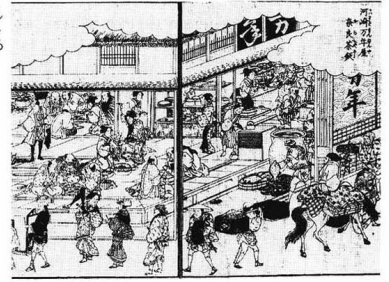
とするならば、住民が消費する米の数十倍は、これらの人々が消費したと考えてよさそうである。

2 神奈川湊での米の集散

市域の町場では大量の移入米が消費されたが、米の移入に際して、最も中心的な役割を果たしたのは神奈川湊であった。この湊は中世以来の伝統を持ち、近世初頭から市域の流通拠点の一つであった拙稿「近世後期における江戸湾内の商品流通」横浜開港資料館紀要」第4号参照)。そのため、穀物商の数も多く、移入米の多くが神奈川湊を経由して各地の町場に転送さ

(第2表) 東海道筋に居住する穀物商

Table with 4 columns: 宿村名 (Village Name), 業種 (Occupation), 軒数 (Number of Shops), 出典 (Source). Lists various villages like '市場村', '鶴見村', '生麦村' and their respective sources of information.



川崎宿の名物、奈良茶飯を商う万年屋。

れた。

ここでは、この湊での米穀流通について記した文書を紹介し、この湊がどのような役割を果たしていたのかを考えたい。まず、文書を掲げよう。

(史料1)

武州橋樹郡 神奈川宿

右宿の儀は前々より廻船問屋と唱候者拾人、仲買と申候者拾式人にて米穀水揚、又は買入・売捌等いたし来候由、既に寛政度出入に相成、曲測甲斐守様御掛にて御裁許、廻船より諸荷物売度由申候節は、其問屋より仲買江申触、直段取組諸方江売捌、又廻船江買入積登度節は同断、問屋より申触、仲買より買入、其外狼之儀不相成由、其後問屋名目御差止被仰出、廻船宿と唱候得共、諸商向は矢張御裁許被仰渡通り取計、尤其時々御支配御役所へ伺之上、商取引罷在候由、当年に至り米買入高、左に奉書上

候

- 一 正月十日 千四百九拾九俵
- 一 二月六日 千七百九拾九俵
- 一 同月十四日 貳千三百俵
- 一 同月十九日 百七拾八俵
- 一 同月三十日 六拾五俵
- 一 同月二六日 千八百五拾七俵
- 一 四月朔日 百俵
- 一 同月十日 貳百七拾八俵
- 一 同月十八日 百九拾俵
- 一 同月三十日 貳百三拾九俵
- 一 五月三日 千貳百三拾俵
- 一 同月二日 百五拾俵
- 一 同月二八日 百七拾五俵
- 一 六月五日 百五拾俵
- 一 同月二日 千貳百六拾俵
- 一 同月二七日 四拾壹俵
- 一 同月二八日 百五拾四俵

合壹万千六百六拾五俵
但、六カ月に割、壹月分
千九百四拾五俵宛

右は諸家様方御蔵米等にて口々多く、相場高下有之、前書買入水揚いたし候由、一体右宿之義は当辺之湊に候間、前段仲買共より同宿内小売之者、其外隣宿々は勿論、羽田・本牧・金沢等江日々売捌候故、誰々手元に置置候と申儀、無之由、尤問屋・仲買等にて凡千五百俵程も当節所持有之由、今般異船一件に付ては当湊は直様御調御封印にも可相成哉、又は人家取払可被仰出も難計と申事にて別段相場掛引など心掛候は無之候

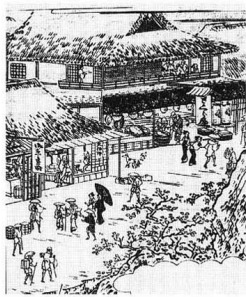
(横浜開港資料館所蔵文書)

この文書は嘉永六年(一八五三)

に作成されたもので、同年一月から六月までの移入米の量・消費の様子を書き上げたものである。文書が作成された理由は記されていないが、ペリー艦隊来航にともなう米の買い占めを防ぐための調査結果を記したものとと思われる。

さて、この年の一月から六月までに神奈川湊に移入された米の量は一万一六六五俵で、一俵あたり四斗とすれば、半年間に四千六百石余の米がこの湊に移入されたことになる。ちなみに、明治十三年(一八八〇)の『神奈川県統計書』には年間六万石以上の米が移入されたと記されており、嘉永六年(一八五三)から明治一〇年代にかけて、米の移入が飛躍的に増大したことを示している。これは横浜開港の影響とも考えられるが、どちらの数字も必ずしも信頼の置けるものではないので、ここでは、幕末から明治一〇年代にかけて大量の米が移入されていたという事実だけを指摘しておきたい。

また、米の消費については、すべての移入米が神奈川宿の「仲買商」を通じて販売されたこととある。



神奈川宿の茶屋

文書によれば、神奈川宿の「仲買商」は二人で、この二人が独占的に移入米を扱っていたようである。宿内の「小売業者」は二人の「仲買商」から米を購入し、その後で米は宿内へ販売された。興味深いのは、移入米が「仲買商」を通じて、近隣の宿場や羽田・本牧などの漁村・金沢八景などの観光地にまで販売されていることである。この点については別の史料にも記述があり、穀物が八王子宿(東京都)などの内陸部まで送られたと記されたものもある(拙稿「近世後期における江戸湾内の商品流通」横浜開港資料館紀要」第4号参照)。

次に掲げる文書は、そうした事実を記したものの一つで、嘉永元年(一八四八)のものである。

(史料2)

(前略)私共義は農圃穀物・荒物・干鰯・糠・塩其外肥類渡世罷在、右八王子宿商人共前書之品々買求候、其初は附送り方等相願候儀に付、木曾村最寄村々より罷出候馬方相雇、戻り馬にて八王子宿へ附通、又は時宜に寄、木曾村並同村最寄八王子宿往來筋村々馬持懸意之もの方へ中継相願候義も有之候、

(中略)

嘉永元年申年九月十日

武州橋樹郡青木町百姓

専助 八郎衛門

神奈川宿 又吉

喜八

清八

利兵衛

利兵衛

三郎兵衛

六兵衛

新兵衛

清七

清六

岩右衛門

清五郎

清六

庄右衛門

御役所

(神奈川県立文化資料館蔵・神奈川宿本陣石井家文書)

さてこの文書から、神奈川宿と

芝生村の商人が「穀物・荒物・干鰯・糠・塩」などを八王子宿へ送っていたことが分かる。これらの商品は神奈川湊の主要取扱品であり、湊から陸揚げされた物資と考えられる。つまり、神奈川宿や、芝生村の商人は、廻船荷物を「仲買商」から購入し、さらに八王子宿の商人に転売していたのである。また、これらの物資の輸送には木曾村(現在町田市)及び木曾村周辺の村々の馬を利用したとあり、街道沿いの村々が米の流通に大きな役割を果たしていたことが分る。以上のように、神奈川湊に陸揚

げされた米は、「仲買商」↓神奈川宿及び芝生村の「小売業者」↓廻船・馬持ち↓各地の町場という形で輸送されたのである。

3 地元の米と町場での消費

以上、移入米について概観したが、次に市域の村々で生産された米についても簡単にみておきたい。先に述べたように、市域の村々で生産される米の多くは、年貢米として江戸に送られていた。しかし、旗本領では、地元の商人に年貢米を売却することが多く、かなりの量の年貢米が地元の町場へ流入したのと思われる。また、村々の「地主」たちは、小作米を近隣の商人に売却し、その一部は地元の町場で消費された。つまり、外からの移入米と並んで、地元の米もかなりの位置を占めていたと思われるのである。

残念ながら、この点についても、具体的な数字を示すことはできないが、いくつかの断片的な史料が残っており、地元の米がどのように町場へ流入したのかを知ることができる。

たとえば、旗本領の年貢米については、生麦村(鶴見区)の今出屋という商人が駒岡村(鶴見区)の商人から年貢米を購入したという記録がある(「関口日記」天保十二年(一八四一)一〇月一四日の記事)。また、町屋村(金沢区)の松本源左衛門は、周辺の商人か

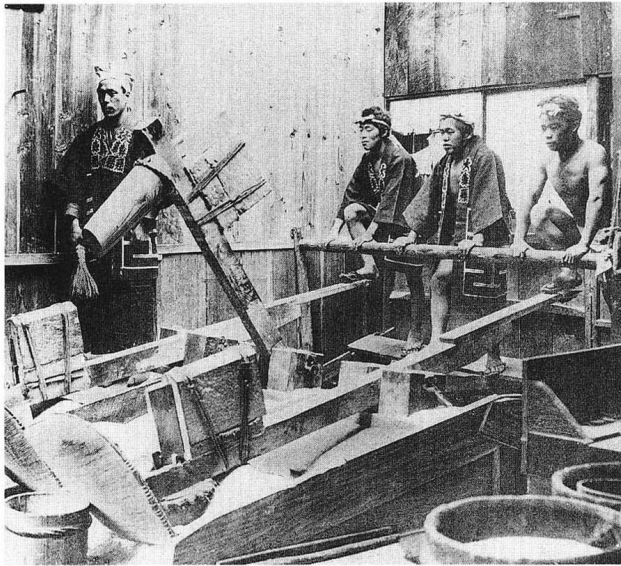
ら旗本領の年貢米を積極的に集荷している(拙稿「横浜新風土記稿」町屋村「たますく」第5号参照)。次に、「地主」が供給する小作米については、鶴見村(鶴見区)の佐久間家という「地主」が、東海道沿いに位置する市場村(鶴見区)の「茶屋」に小作米を売却した例がある(鶴見区・佐久間亮一家文書)。

慶応二年(一八六六)の記録では、同家の小作米の約四分の一にあたる七二俵の米が、市場村の「亀屋」という「茶屋」に売却されている。この「亀屋」は東海道の名物の一つである「よねまんじゅう」

を商った「茶屋」で、佐久間家の小作米はその原料に使用されたものと考えられる。おそらくこうした例は町場周辺では一般的に行われ、町場の商人たちはかなりの量の年貢米や小作米を扱った。次に掲げる文書はそうした事例の一つで、戸塚宿周辺の米商人たちが、宿場の春米屋に米を供給していたことを示すものである。

(史料3)

近來米穀格外高直に相成候に就ては(中略)私共村々一統申合、身元之者共に篤と相談之上、村々より他所へ売穀有之候節は、右仲



春米屋

(第3表) 戸塚宿に米を供給した村と商人

No.	郡名	村名	米商人の数
1	鎌倉郡	尾村	3
2	//	柏上	1
3	//	矢部	4
4	//	津村	2
5	//	瀨田	4
6	//	中田	2
7	//	上飯	9
8	//	和泉	9
9	//	瀬谷	1
10	//	宮野	2
11	//	宮沢	2
12	高座郡	阿久和田	2
13	//	上和田	5
14	//	深見	2
15	//	長後	5
16	//	上川	4
17	//	中下	1
18	//	下川	8
19	//	上川	5
20	//	下川	4
21	//	福田	4
22	//	鶴間	4
23	//	草柳	8

4 おわりに

以上、市域の米穀消費について考察したが、残された課題は極めて多い。本稿ではわずかに残された文書を羅列したにすぎないが、現在のところ、これ以上の考察は不可能であろう。今後、関係史料が発掘されることを期待すると同時に、残された断片的な史料を繋ぎ合せる作業を続けていきたいと考えている。

また、本稿では市域の米穀市場を概観したが、最も大きな町場である横浜市街地については触れることができなかった。この点についても今後の課題とせざるをえないが、市域での横浜市街地の位置を考えると同時に、近代的な米穀市場が形成されていく中で、横浜市街地が全国的にどのような位置を占めていくのかも併せて考えていきたい。

(西川武臣)

この文書には、戸塚宿周辺の村々二三口村に居住する米商人が名を連ねている(第3表参照)。彼らは宿場での米不足に対し、村々で「売り米」が出来た際には、その米を購入し、宿場の春米屋に売却することを申し合わせている。この文書から、幕末期には宿場向けの米穀生産が展開し、周辺村落の米によって宿場での米の消費が支えられていたことを伺うことができる。

横浜人物小誌 17

横浜市の初代議長

原善三郎

一八五九年の横浜開港から一八八九年の横浜市誕生まで数えて三〇年間、人間の世代間の間隔にほぼ近い年月である。この間に歴史の表舞台に登場した人物のうち、横浜の歴史を最もよく象徴する人物を選ぶとすれば、誰を挙げるべきであろうか。

私は原(亀屋)善三郎(一八二七〜九九)を第一に推す。今日の彼の知名度は、その跡取りであり三溪園で有名な原富太郎(号は三選)には及ばない(なお、今年三月、白崎秀雄氏の好著『三溪原富太郎』が刊行された)。しかし、埼玉の農村に生まれ、満三三歳にして開港三月後の横浜の地を踏み、生糸貿易によって短期間に莫大な富を築き、横浜の政財界の要職を務めた彼こそは、生糸貿易の港町であった横浜の「顔」であった。

よく引かれる「横浜は、善くも悪しくも、亀善の、はら一つにて、事決まるなり」という日清戦後に流行った狂歌は、彼の横浜への影響力を雄弁に物語る。横浜生糸商人の盛衰は激しく、幕末・明治前期を澁りぬけ、大生糸貿易商とし

て横浜市の誕生を迎えたものは、彼のほかには、茂木惣兵衛しかいない。

歴史的人物としての原善三郎の重要性は次の三点にあらう。①長期間にわたり生糸貿易の頂点に立った大貿易商としての経済活動、②明治前期の「商権回復」運動におけるリーダーシップ、③自由民権期・議会開設期における政治的行動である。このうち、③については、『横浜市史』第三巻下の石井孝氏の叙述などで注目されながら、今日に至ってもあまりよくわ



原善三郎

かっている。書簡・日記などがほとんどなく、まとまった伝記としては、『原善三郎伝』(『横浜どんたく』所収)しか私は知らない。

そこで、断片的ではあるが、昨年気がついた伊藤知遊(仁太郎)の一連の横浜人物評のなかの原善三郎に

関する部分を紹介しておきたい。知遊は、議会開設期の横浜共有物事件などの扮演を語りつつ、次のように評している。

〔市会〕議長には、原善三郎が当選したのだが、議長ぶりがすこぶる振るっていた。生糸元込商ではひとときわ抜いて勢力があった。文字は無い人であったが、どことなく人物はできていた。貧乏人から成り上がった人で、

実の所を言えば、市制の条文すら解釈し得ぬのであったが、議場の整理はなかなかうまいものであった。要するに、学問はないが、多年社会の波風にもまれて来て、自然の熟練と肝玉のすわりがよかつたために、議長ぶりがよかつたのだらう、と

思う。ただ困るのは、ときどき議長から議員に、これはどういうことにしたのかと言つて、議場整理について相談を掛けることがあつて、議員に腹の皮を燃らせたことがある。議長を困らせようとしている議員に向かつて議場の整理を公然と議場で始めるのは面白い。これには議長をいじめに掛かつていた人も噴き出してしまつて、騒ぐ事でもできなくなつた、という奇観もしばしばあつた。

また別の箇所では、〔前略〕ごくつまらない者から成り上がった人としては存外に人格もあつたし、その上に胆力

もあつて、横浜市会議長の当時でも、この人の採決ぶりには、多少公会と私会との区別を誤るような場合はあつたが、概して公平で評判はよかつた。横浜の開発についても相当に尽力した。亀善の名は永久に横浜の地から失いたくないものである、とほくらくも今日になってなおそう思うくらいだ。〔伊藤知遊全集〕

第一二巻、三〇六、二九四〜五頁) 二点ほどコメントしておこう。素養について「原善三郎伝」は、原の成長期の教育を、村の寺子屋でのせいぜい「庭訓(往來)の走り書きを真書(楷書)に書き改むる」程度のものでし、「書を読む事に掛けて氏が幼児の出来はえは敏きにもあらず、鈍きにもあらず、物覚ふる事亦然なり」と記す。『ごくつまらない者』(『条文すら解釈し得ぬ』は誇張が過ぎようが、まさに、たたきあげの苦勞人であつたらしい。

また、地主派の彼に対する評価が高いことに注目したい。引用中にある善三郎が初代議長をつとめた最初の市会(市議會)で、商人派と地主派の議員は激しく対立し、結局市会は解散される(『開港のひろば』第二号参照)が、地主サイドに立っていた知遊の記述は、いちおう信用できるとあらう。市

会解散の後、横浜商人は二つに分裂し、原善三郎・木村利右衛門ら

に率いられる一派は地主派に接近していく。 さて、議会開設期をこのような経験から始めた原善三郎は、自由党系の地主派と横浜商人の接近・連合という横浜政治の新しい動きの先頭を切つたばかりではなかつた。三年後の第二回総選挙に、郷里の埼玉県第五区(秩父・児玉郡)から出馬して当選し、その後二回の総選挙にも勝つて衆議院議員として活躍し、三期めの途中で貴族院議員に選ばれた。一八九四年一〇月の臨時帝國議会の衆議院副議長選挙では、横浜選出の代議士島田三郎が一五六票で当選するが、この時、原善三郎も田口卯吉の九九票に次ぐ八四四票を集めた。〔東京朝日新聞〕明治二七・一〇・一六、『新聞集成明治編年史』所収。

彼の政治家としての活躍をも含めて、あらためて、原善三郎を見直す必要を感じる昨今ではある。大方の御教示をお願いする次第である。(井川克彦)

慶応丑の元年、神奈川の下車屋儀兵衛と呼べる者の跡式を金千円にて譲り受け、弁天通り三丁目なる今の亀善の店を開き、故郷山正の号を改めて、岡とせり。



『横浜どんたく』より

閲覧室 から

今回は、当館発行の資料集を紹介しようと思います。

○『吉村屋幸兵衛関係書簡』全四巻(昭和五九〜六二年)

これは、横浜の生糸売込商吉村屋(吉田)幸兵衛と上州山田郡大

間々町の実家との間にとりかわされたものを中心に、慶応四年(一八六八)閏四月から明治五年(一八七二)二月までの書簡により構成されています。明治初年の経営活動及び吉村屋をとりまく横浜の状況を具体的に知ることのできる資料です。

○『堤磯右衛門 幕末維新「懐中覚」』(昭和六三年 定価一、〇〇〇円)

この「懐中覚」は全九冊、万延元年(一八六〇)から明治一〇年(一八七七)までの間、武蔵国久良岐郡磯子村の堤磯右衛門が綴った手記です。彼は村方の年寄役の

さし絵を中心に、フランスに伝えられた幕末・明治の日本の姿を紹介する。

(2)『幕末の横浜を彩る人びと』東海道と江戸湾をめぐって』

12/7〜3月 幕末期、江戸湾に面した東海道沿いの地域からは、商人・医者・剣術家・土木技術者など、さまざまな分野で活躍した人々が生まれている。彼らの存在は、この地域の経済と文化の隆盛を示すものであり、展示では彼らの活動を紹介すると同時に、幕末期の横浜の様相を明らかにする。

○『横濱歴史講座「幕末・明治の横浜の外国商館」

9/3「外国商社と海運業」イギリス系商社を中心に」服部一馬

ほか、江戸の土木請負業威田清右衛門の手代として、横須賀製鉄所、横浜居留地等の築造工事にかかわり、明治六年には、横浜で国産初の石鹼の製造に成功しました。幕末・明治の政局や人々の動向、風聞、物価や相場の変動、その中の磯右衛門の行動等が書きとめられ、興味深い記録となっています。

○『横濱水道関係資料集 一八六二〜一九七』(昭和六二年 樋口次郎編訳 定価六〇〇円)

この資料集は、幕末期から横浜水道第一次拡張に至る明治二〇年(一八九七)までの、横浜の水、水道、衛生改革等に関する記事、

(関東学園大学教授、9/17「横浜のドイツ系商社」D・ファン・デア・ラーン(ドイツ東洋文化研究協会)、10/1「横浜の外国銀行」立脇和夫(静岡県立大学教授、10/15「横浜のオランダ系商社」向井晃(東海大学教授、10/29「横浜のアメリカ系商社」福永郁雄(日本英学史学会、全五回受講料)一、五〇〇円)

(2)資料講読講座「アメリカ人宣教師の手紙(英文)を読む」

S・W・ウィリアムズの手紙を講読し、幕末・明治期の日本と中国の歴史について考える。10/8・22、11/12・26、12/10隔週土曜日全五回 講師・加藤祐三(横浜市立大学教授)

(3)『幕末の横浜を彩る人びと』展

評論、報告を『ジャパン・ウィークリー・メール』など横浜発行の英字新聞から収録したものです。横浜水道の創設前後の様子や、居留地在住の欧米人の意見がうかがわれます。

○『「イリュストラシオン」日本関係記事集』第一・二巻(昭和六一・六三年 定価各一、五〇〇円)

『イリュストラシオン』は一八四三年パリで創刊された絵入り週刊紙で、前年ロンドンで発刊された『イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』を模したものとされています。この記事集は、その中から日本関係記事を抜粋したもので、

評論、報告を『ジャパン・ウィークリー・メール』など横浜発行の英字新聞から収録したものです。横浜水道の創設前後の様子や、居留地在住の欧米人の意見がうかがわれます。

○『「イリュストラシオン」日本関係記事集』第一・二巻(昭和六一・六三年 定価各一、五〇〇円)

『イリュストラシオン』は一八四三年パリで創刊された絵入り週刊紙で、前年ロンドンで発刊された『イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』を模したものとされています。この記事集は、その中から日本関係記事を抜粋したもので、

評論、報告を『ジャパン・ウィークリー・メール』など横浜発行の英字新聞から収録したものです。横浜水道の創設前後の様子や、居留地在住の欧米人の意見がうかがわれます。

○『「イリュストラシオン」日本関係記事集』第一・二巻(昭和六一・六三年 定価各一、五〇〇円)

『イリュストラシオン』は一八四三年パリで創刊された絵入り週刊紙で、前年ロンドンで発刊された『イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』を模したものとされています。この記事集は、その中から日本関係記事を抜粋したもので、

評論、報告を『ジャパン・ウィークリー・メール』など横浜発行の英字新聞から収録したものです。横浜水道の創設前後の様子や、居留地在住の欧米人の意見がうかがわれます。

○『「イリュストラシオン」日本関係記事集』第一・二巻(昭和六一・六三年 定価各一、五〇〇円)

『イリュストラシオン』は一八四三年パリで創刊された絵入り週刊紙で、前年ロンドンで発刊された『イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』を模したものとされています。この記事集は、その中から日本関係記事を抜粋したもので、

評論、報告を『ジャパン・ウィークリー・メール』など横浜発行の英字新聞から収録したものです。横浜水道の創設前後の様子や、居留地在住の欧米人の意見がうかがわれます。

○『「イリュストラシオン」日本関係記事集』第一・二巻(昭和六一・六三年 定価各一、五〇〇円)

『イリュストラシオン』は一八四三年パリで創刊された絵入り週刊紙で、前年ロンドンで発刊された『イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』を模したものとされています。この記事集は、その中から日本関係記事を抜粋したもので、



行事開催予定 昭和六三年度

▼展示

(1)『フランス人の描いた幕末・明治の日本』

8/3〜12/4 フランスの絵入り新聞『イリュストラシオン』や『ル・モンド・イリュストレ』の

関連講座

昭和64年1/14・21・28、2/4・11各土曜日全五回 講師未定

ミニ情報

▼寄贈資料

(1)弁天通渡辺文七商店関係資料 86点 (保土ヶ谷区月見台 渡辺慎吉氏)

(2)長州藩軍艦「丙寅丸」旧蔵江戸湾海図 2点 (神奈川県入江大貫芳雄氏)

(3)有賀初吉辞令等資料 85点 東京都北区桐ヶ岡 有賀完爾氏

▼寄託資料

(1)牛島辰五郎旧蔵横浜船渠株式会社第一〜三号ドック築造工事等写真 六〇一点 (中区根岸町 牛島和夫・恩地薫氏)

掲載年月日順に記事を配列し、それぞれにタイトルの翻訳と解題を付しています。激動する時代の日仏両国の関係をうかがう一つの素材として、興味深いものだと思います。展示と合わせて是非ご覧ください。

以上の資料集は、受付で販売していますので、ご利用ください。なお、『吉村屋幸兵衛関係書簡』については、在庫がありませんので、閲覧室のファイルボックスをご覧ください。(上田由美)

▼出版物

(1)『木村芥舟とその資料 旧幕臣の記録』 頒価一、〇〇〇円

(2)『ブルーム・コレクション書籍目録 第四巻』 補遺・逐次刊行物目録・索引 頒価六〇〇円

(3)『横浜もののはじめ考』 予価二、〇〇〇円

(4)『「イリュストラシオン」日本関係記事集 第二巻 予価一、五〇〇円

(5)『ル・モンド・イリュストレ』日本関係さし絵集 予価一、〇〇〇円